

二〇一六年度 入学試験問題

経済学部A方式Ⅱ日程・社会学部A方式Ⅱ日程・スポーツ健康学部A方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

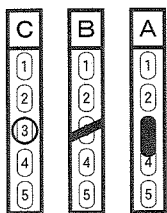
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



○でかこまないこと。

枠外にはみださないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ルイ十四世の時代に入ってパリの様相は大きく変化する。もちろん、当時のパリは人口の面でも市域のひろ拡がりという面でも、今日とくらべてはるかに規模が小さい。セーヌ川を挟んだ直径三キロ程度の円形になった小ぶりの町におよそ四〇万人が住み、市内を埋める大多数の民家はまだ木造で、現在、ノルマンディーなどにわずかに残っている半木骨造りの集落がそのままパリの日常的な風景となっていた。少なくともアンリ四世が入城した一六〇〇年前後のパリは、中世そのままの町並みといってもよかつた。

この小さな町に大々的な改造が始まるのは、十七世紀の後半に入つてであり、ルーヴル計画をケイキとしてそれまでの古めかしい町の様相が一変する。ルイ十四世とコルベールの「①グランド・デザイン」の思想が都市計画の分野にも確実に及んできたのである。

現在ではごく普通に用いる「都市計画」の用語も当時は存在せず、都市整備に関する考え方も十七世紀の時点ではこれまた大きく違つていた。都市計画なる言葉が普通に用いられるようになるのは十九世紀後半から二十世紀にかけてであつて、フランス革命以前のアンシャン・レジーム下においては、それにもっとも近い言葉として「美装」の用語が用いられていた。町を美しく装ふことの意味だが、この言葉自体は十七世紀の古典主義美学のなかで登場し、やがて制度として定着していったものである。その実態は、制度上、「道路整備」に重点が置かれ、わかりやすく言えば、「道路や街路をきちんと整備することによって、町を美しく仕立てる」というかたちで、都市行政がなされたということである。

フランスにおける十七世紀から十八世紀にかけての都市整備の考え方は、それまでの中世、ルネサンス的な価値観から離れて、近代を前提として都市のあり方を示したという点できわめて重要である。都市なるものが、自然発生の集合ではなく、②計画的エイイの積み重ねとして認識され、

ア ひとつの王国という国土の体系のなかで政治・社会的な核として人々の集住をともなつて成立し、空間のうえで人々の近代的な生活行為に見合ったスケールで構想される。都市としての格式を保ち、

何よりも美しくなければならぬ。道を造ることは、単に人や馬車が通行するだけのスペースを確保するというのではなく、それに付属した建物を含めた総合的かつ美学的な空間整備であることをこの「美装」の概念のなかに示したわけである。そこに要求されるのは、二十世紀の都市行政がしばしば行うような平面的な道路の建設ではなく、都市という三次元的な集合体のなかで立体的な発想で道を造るということでもある。

ルイ十四世期に至る都市計画の基礎は、祖父のアンリ四世の時代にすでに打ち立てられていた。ルーヴル宮殿の大拡張を構想し、パリを王国の首都に造り替えようとしたアンリ四世にしてみれば、その根柢としてさまざまな法的、かつ制度上の改革を行うのは当然のことであり、その帰結として「フランス視察大監」の職を設けて、シュリー公をその任に就けた。都市整備のための権限をもった官職で、以後この官職が名を変えながら都市行政の中核として発展していく。

十八世紀の終わりに編纂された都市計画の解説書『道路整備辞典』を眺めると、^②「道路整備」には二つの意味があるとされた。

ひとつは、土木技術上の問題であり、道路そのものの建設や維持監理まですべての点を含み込むとされる。他のひとつは、都市全体のなかで道路に面して建つ建物のヨウリヨウやファサード(建物の正面)を並べる建築線に関わる問題で、要は道路に面した建物の規制とデザインの監理である。

このことからわかるように、道(道路、街路)の整備とは、それ自身が道それだけの問題にとどまらず、環境そのものをコントロールしていく仕組みとして理解されていたのである。言い換えれば、アンリ四世期に始まる道路整備行政が公共による都市計画の中心的部分として機能していたということでもある。

「フランス視察大監」の職は一五九九年に創設される。その内容が法制化されるのは一六〇七年の勅令で、それまで A になされてきた町の造り方を明文化し、新たな都市的な建造物のあり方などを示した。道路境界に沿って建物のファサードを連ねる建築線が定められ、今日の確認申請の原型である建築許可の制度もこの時点で確立された。パリをはじめとするフランスの各都市で、以後、街路沿いに高さやボリュームが一樣の景観が生み出されていく根柢となったのがこの法律である。

アンリ四世は、パリの町の街路の拡幅事業を積極的に進め、三、四メートル幅の街路を七メートル強に押し拡げた。そのた
めにも、建築線の制度は有効であった。また、街路沿いの植樹も奨励され、「並木道」の考え方が芽生えてくる。

もつとも、制度が生まれ国王が進んで町並みの改造をめざしたとしても、町全体の経済力がともない、人々の活気がなければその事業は進まない。既存の建築は中世以来の半木骨造り建築で、これらが新しい建物に置き換わり、町並みが「近代化」されるにはその先一世紀を必要とした。建築の寿命が今日の日本のように三〇年などと想定されていたわけでもなく、社会の発展状況に応じて一〇〇年から二〇〇年くらいで建物が変化するヨーロッパでは、町の変化もゆつたりとしていた。

その後、ルイ十三世からルイ十四世にかけて、道路整備のための体制が徐々に変化を遂げていった。シュリー公が担っていた「フランス視察大監」の部局は一六二六年に廃止され、その権限は財務統監のもとに組み込まれる。フロンドの乱などの内乱のなかで現実の都市整備はほとんどなされない時期が続くが、やがてルイ十四世が王の力を示すものとして建設活動に強い関心をもつようになるとともに、道路整備の役職は再び大きな力をもつようになってくる。

パリの町並みをかたちづくるうえで決定的な意味をもったのは、ルイ十四世という強大な権力もち、対外的にも超大国としての地位をフランスが得るようになって、国土防衛の思想が大きく変わり、パリの市壁が不要になったことである。敵は町の周囲に壁を設けて食い止めるのではなく、国境で防ぐということになり、首都を針ねずみのように取り囲んでいる厚い市壁はもはや必要がないとされたわけである。

イ 一六七〇年から七六年にかけ、市壁が取り壊され、その跡地が広い幅員をともなった「大街道」^{ブールヴァール}に造り替えられた。十九世紀後半から世界中に広まる並木道の原型はここに始まるのである。

この「ブールヴァール」の語源は、十五世紀から十七世紀にかけ、都市を取り巻く市壁の外側に、その防衛力を増すことを目的として大砲を置くために造られたテラス状の陣地のことであり、軍事用語であった。それが、この時代に道路を造り替えられたことで、その道路自体がブールヴァールと呼ばれるようになったのである。当時としては、ブールヴァールと呼ばれる道は、パリの周りを取り囲む広い道幅と街路樹をともなったカンジヨウの街路に限られていたが、このルイ十四世のパリがモデルとなって、都市内の広い並木道一般を指して用いられるようになった。

ブルヴァールの成立は、もうひとつ別の側面をもっている。街路のなかに並木を導入することにより、馬車のための車道と人間のための歩道が分離され、いわゆる歩車分離の原則が確立されたことである。それまでの町並みは、狭い街路の上を人も馬車も、そして場合によっては商売用の屋台なども、一緒に利用されていた。アンリ四世以来の街路拡幅の試みは、この混乱した街路を機能的に再編しようとしたものであるが、ルイ十四世の時代になって、ブルヴァール建設事業にともなうて新しい道路のモデルが実現されたのである。

森のなかに造られたヴェルサイユの地は、パリとは違って、中世以来のしがらみのまったくない「理想都市」であった。

ウ、ここでの道路計画は、このブルヴァールの思想を徹底させていた。宮殿から放射状に拡がる三本の道は、いずれもブルヴァールとしての特質をもち、ヴェルサイユにふさわしいイゲン(5)をそなえていた。しかもその広さは、六頭立ての馬車がすれ違うことのできる道幅と、人間のための歩道を含めたものである。街路樹は景観上の特質だけでなく、歩車分離のうえでも大きな役割を果たした。

このブルヴァールの設計思想は十八世紀から十九世紀にかけてきわめて有効に働き、ナポレオン三世のパリ大改造においてはその基本的な街路計画の骨子となっていた。自動車の時代に入っても十分にその機能を果たしたのは、自動車が馬車をモデルにしていたためである。

(三宅理一『パリのグランド・デザイン』より。ただし原文の一部を変更した。)

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナにふさわしい漢字を、つぎの各群の a～h の中からそれぞれ二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(1)	ケイキ	a	景	b	刑	c	契	d	計
		e	器	f	機	g	気	h	期
(2)	エイイ	a	栄	b	営	c	鋭	d	永
		e	意	f	位	g	為	h	以
(3)	ヨウリョウ	a	洋	b	容	c	要	d	葉
		e	頷	f	料	g	両	h	量
(4)	カンジヨウ	a	感	b	間	c	官	d	環
		e	状	f	上	g	情	h	定
(5)	イゲン	a	威	b	易	c	異	d	違
		e	限	f	蔽	g	験	h	言

問二 本文中の空欄

ア

ウ

に入る最も適切なものを、つぎの各群の a～e の中からそれぞれ一つ選び、その

記号を解答欄にマークせよ。

ア	a	しかし	b	あるいは	c	けれども	d	ともかく	e	しかも
イ	a	ともあれ	b	そのため	c	したがって	d	ところが	e	しかし
ウ	a	なぜなら	b	ひるがえって	c	とはいえ	d	したがって	e	にもかかわらず

問三 傍線部①に『グランド・デザイン』の思想とあるが、その内容に合致する最も適切なものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a フランスの封建社会においては、町はルネサンス的価値を基本に考えられていた。
- b 「都市計画」の用語が生まれる前のフランスは、「美装」という概念があったが、都市行政としての取り組みはなかった。
- c パリの道路は人や馬の通行が出来るスペースを確保するという役割だけがあった。
- d 「美装」という古典主義美学の言葉が定着してからは、都市を美しくし、格式を保つことが重要であった。
- e 道造る上で要求されたのは、道路を平面的に認識して建設することであった。

問四 傍線部②「道路整備」の内容にあてはまるものを、つぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a アンリ四世はシュリー公を特別な官職に就けて、都市整備の基礎を固めた。
- b 『道路整備辞典』によると、道路整備には土木技術と建物規制の二つの意味があった。
- c 道の整備では、新たな都市に造られる建物とその環境にも配慮することが求められた。
- d 道路整備のために各都市で建築線が定められ、人々の生活が停滞した。
- e ルイ十四世が財務統監を重用したため、「フランス視察大監」が廃止された。

問五 空欄 A に入るふさわしい語句として最も適切なものを、つぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 固定的
- b 多角的
- c 一方的
- d 慣習的
- e 機械的

問六 本文中で筆者が主張している「ブルヴァール」の考え方と合致しないものを、つぎのa～eの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 首都を囲む市壁は、国土防衛の思想が元となっていた。
- b ヴェルサイユの道路計画は、現代の車社会では通用しないものであった。
- c 理想都市ではブルヴァールの思想が徹底されていた。
- d ナポレオン三世はブルヴァールをパリ大改造の骨子に据えた。
- e ブルヴァールは、歩行者と馬車が共用する街路を実現した。

(二) つぎの文章は、西アフリカ・ブルキナファソ国のモシ文化を研究対象とする日本人の文化人類学者が、研究のために長期に滞在したことのあるフランスの文化と自文化である日本文化の三つの文化を比較対照しながら考察したものである。この文章を読んで、後の問いに答えよ。

西欧文化一般とも多くの共通性をもつフランス文化は、第一にその二重の人間非依存指向^①によって特徴づけられるが、これは日本文化に見出される二重の人間依存指向と明確な対照をなしている。フランス文化の二重の人間非依存指向は、第一に、使い手個人の巧拙によらずに、常によい結果を得られるように道具を工夫することであり、第二に、非・人間エネルギーを最大限に利用して、人間の労力を省き、同時により効率の大きい結果を得られるようにすることである。

これと対照をなして、日本文化の二重の人間依存性は、第一に、単純で特殊化していない道具を高度に訓練された人間の巧みさで多様に、有効に使いこなすこと、第二に、良い結果を得るために、惜しみなく人力を投入すること、によって特徴づけられる。

フランス文化に認められる指向は、ヨーロッパ文明がその一つの派生形である西アジアの農耕牧畜文化に由来するものであり、最大限の家畜の利用、乳や肉や皮や毛だけでなく、畜力も利用する考え方に基づいている。この指向性の起源は、『旧約聖書』の『創世記』によって正当化されている。「創世記」第一章～第三章によれば、創造神は己の姿に似せて人間を造り、他の動物たちを人間に役立つように造った。このようにして、人間は他の生きものたちの主人になるべく、創造神によって選ばれたのだ。この人間中心主義の確信は、さきに述べた技術についての考え方とともに創造神が人間に示した、偉大な書物とみなされる自然を解説する、人類の努力の一部としての科学的探求に支えられてきたといえる。つまりこの文化は、非西洋世界も含む近代世界の指導原理となった、人権の考えをはじめとする近代ヒューマニズムに、思想的基礎を提供したといえる。

畜力や、水力^②、風力から、化石燃料のエネルギー、核エネルギーへと移った人間以外のエネルギーの利用は、エネルギー伝達装置の工夫を促した。車輪などの回転原理の広汎な使用、歯車、連結ベルトや連結棒^{れんけつぼう}などは(車輪が、日本の技術文化で極

めて限られた範囲で用いられていた以外)、日本文化にも、道具が人体の延長にとどまったモシの技術文化にも、一六〇〇年頃から三世紀半のあいだに外来の装置として取り入れられたものを除けば、存在しなかった。回転原理のみならず、槌子の原理を応用した道具もなかったモシ文化の場合、人体の道具化という表現も可能であろう。骨盤が前傾しているため深前屈が楽な上半身と長い腕が、長い柄の働きをする短い柄の鋏、鍛冶師の柄のない鉄槌、モシ社会ではないが、同じブルキナファソ国のロビ社会や、近接するマリ国のパンバラ社会などで、轆轤を回転させるのではなく、人間が立って深く前屈したまま、土器のまわりを回って成形するやり方などに、人体の道具化の例を見ることができると。

フランス語で道具を意味する“outil”は“ustensilia”というラテン語に由来しており、“uti”「役立つ」、「user」³「使い尽くす」という感覚を帯びている。これは日本語の「道具」が元来は仏教用語で、「道」を学ぶための手立てであるという、道具を尊ぶ考え方とは対照をなしている。人間の行動の基本的指向として、「目的指向」と「過程尊重」という逆向きの価値観を対置させたとすれば、フランスをはじめとして、いわゆる近代合理主義にいたる価値観を支えてきた指向は、「目的指向」であり、社会の相互合意性の高い日本文化やモシ文化、とくに社会と文化の同質性が高い日本では、「過程尊重」の価値観がつかったといえる。「目的指向」はある目的を設定し、それを達成する最も効果的な手段を工夫する指向であるが、「過程尊重」は結果よりもそこにいたる手続きや態度の、倫理的のみならず審美的な価値にこだわるものである。目的指向が最も強く要求されるはずの戦闘行為においてさえ、日本では敵味方が共通の倫理観や美意識をもちえた状況から生まれた、過程尊重の事例を数多く見出すことができる。

技術文化における日本人の道具尊重の観念は、職人が道具をまたいだり足で押ししたりしない、剣道で竹刀をまたがらないなどのしきたりにもあらわれている。農民が歳末に「道具のお年取り」といって、農具を洗い磨きあげて飾り、餅を供えてねぎらうとか、針供養のように、折れた針を豆腐や蒟蒻に刺して慰めるなどの行事にも認められる、道具についての **A** と **B**、ひいては道具の呪物崇拜とも呼べるような態度も、過程尊重のあらわれとみることができよう。この点では、人体の道具化の指向がつかよく、「道具」に対する意識そのものが重要でないモシ文化は、むしろフランス文化に近い。

このようにしてフランス文化では、人間の労力や巧みさは、非人間エネルギーの伝達を操作することに主に使われてきたといえる。そのよい例は、自動車の運転に見ることができる。同じ原則は、犁うがひや荷車を動物に牽ひかせるという家畜の利用のうちにすでに認められる。人力を用いる苦しい活動を、このような仕掛けを用いて軽減することは、フランス文化の基礎をなしている労働に対する態度とよく整合している。ここでは労働は、根源において必要悪とみなされるからである。

このことは、フランス語で労働を表わすトラヴァーユという言葉に象徴的に表れている。この言葉は、古代ローマで拷問に用いられた、訊問される人間を縛りつける三本柱トリバリウムという語に由来している。近代資本主義経済においても、経営者・労働者の双方にとって、労働は最小にすることが望ましい要因とみなされる。トラヴァーユという語は、女性の陣痛、分娩も意味し、産室は、サル・ド・トラヴァーユと呼ばれる。これは、『旧約聖書』創世記第三章で、禁断の樹の実を食べた女に、創造神ヤハウェが出産の苦痛を与え、男には食を得るために土地を耕す労苦(フランス語訳では「トラヴァーユ」)を課したという、人間の元祖がエデンの園から追放された物語に由来するのであろう。

土を耕すこと(フランス語のラブル、英語で労働を意味するレイバー)も、神から人間に課せられた罰というところさえ方がもたれている。

② 日本では、家に仕事に來た職人に「ご苦労さま」とねぎらいのことばをかけるが、フランス語にはこれに対応する常用句がない。フランス人にたずねると、賃金をもらって仕事をしているのだから、そのうえに感謝の意をあらわす必要はないという。「契約」観念がもたれた労働観の答えが返ってくる。労働をめぐる契約観念がさらに希薄なモシ文化では、労をねぎらい、たたえる常用句は、日本よりさらに豊かだ。

モシ語と同様、契約観念が不在ないし希薄な日本語で、フランス語の「トラヴァーユ」に対応する「はたらき」、動詞形の「はたらく」は、元来、報酬を求めない献身的行為を意味しているが、これは主人と従属者、年長者と若年者、師匠と弟子など、恩恵と義務、尊敬と卑下などの不平等な二者関係のなかでの、経済外的強制が重要だったことと関連しているだろう。日本語では、これら不平等な二者間では、呼びかけの名詞や代名詞も非対称だ。上の者は下の者には「おまえ」「あなた」「きみ」などの

人称代名詞で呼びかけることができるが、下の者から上の者に向かって「あなた」とは言えず、相手の名に敬称をつけたり、三人称風に相手の地位名で呼びかけたりする。日本語では呼びかけの親族名称と人称代名詞も非対称だ。子は父に「おとうさん」と呼びかけることはできるが、「あなた」という人称代名詞は用いない。フランス語やモシ語では可能な、父親から「わたしのむすこよ」という親族名称を用いた呼びかけは、日本語では考えられない。

世界観を、モシ文化について見ると、不可視の至高の力ウエンデが人間の運命(ウエンプレンボ)を造る。だが人間はウエンデにはたらきかけ、とりいつて(ベレム)、困難から逃れられるように取計らってもら(マヌゲ)べく、祖先の霊や荒れ野の精(キンキルセ)を仲介者として、生贄けいげなどの供えものをする。この意味で、モシ人は宿命論者ではない。彼らは世界が至高の力に支配されていると思っているが、人間は仲介者を通じて働きかけ、その至高の力に取りはからいを求める。

間の運命は、人間の力で変えられるのだ。この働きかけを表す動詞ベレムという語は、モシ社会の日常生活で頻繁に用いられ、実践される。不可視の至高の力ウエンデに対してだけでなく、⁽⁴⁾対人関係においても、最高首長である王や、その下のさまざまな位階の首長に対して、あるいはすべての権力者や社会的影響力のある者に対しても。何か贈り物をしたり、時機に応じた労役を提供したり、挨拶に行ったりして、必要な時にしかるべく取計らってもら(マヌゲ)を、多くの場合仲介者を通じて頼むのである。ベレムとマヌゲという、日常頻繁に用いられる二つの動詞によって表される観念は、モシ社会の価値指向を理解する鍵となるものである。

だが、このように不可視の力や、社会的有力者との関係を平素から良好に保つことによつて、念願や事業を達成するという契約観念とは逆の指向は、表われ方の違いはあるにせよ、日本社会にも、かつては強く、現在でもかなりの程度見られる。八百万やおよろずの神や仏への願いごと、事柄を特定せずに「よろしく願います」という初対面の挨拶、特定の便宜供与などへの謝礼ではない毎年の盆暮の贈りものなどの風習に、それはあらわれている。

ウ

モシの技術文化に見出される価値指向性は、「与えられた状況を最大限に活用すること」と要約できるだろう。この価値指向性に基づいて、技術的側面においては、モシ人は「⁽³⁾プリコラージュ」を精錬して来たといえる。つまり特定のシス

テムにおける「純正部品」に頼るのではなく、見かけの、あるいは機能上の類似によって、当面手に入るありあわせの素材で、同じ結果を得るように工夫するのである。

「プリコラージュ」というフランス語は、元来は、偶然に都合良く起こったこと、例えばビリヤードで突いた球が思いがけず有利な動きをしたとか、騎乗して森の中を歩いていた馬が、上手に難所を乗り越えたとかを指して用いられた「プリコレ」という動詞に由来している。二十世紀初めにフランスで、機械化された近代産業の画一化された製品に対する一種の抵抗として、すでに使い古されたありあわせの材料で、ある目的になつたものをこしらえる、あるいは風変わりな造形表象を制作することがおこなわれ、それが「プリコラージュ」と呼ばれた。一九五〇年代になると、さまざまな機械の廃品を組み合わせた立体造形表現が、メキシコやアフリカをはじめとして盛んになり、「ジャンク・アート」と呼ばれるようになったが、二十世紀初めにフランスで生まれた「プリコラージュ」は、「ジャンク・アート」を半世紀先取りしていたといえるかもしれない。

(川田順造『文化を交叉させる——人類学者の眼』より。ただし原文の一部を変更した。)

問一 本文中の空欄

ア

ウ

に入る最も適切なものを、つぎの各群 a ～ e の中からそれぞれ一つ選び、その記

号を解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|--------|---|---------|---|---------|---|------|
| ア | a | いずれにせよ | b | しかしながら | c | まさに | d | とほいうものの | e | もつとも |
| イ | a | ましてや | b | そして | c | とほいうものの | d | だから | e | けれども |
| ウ | a | とはいえ | b | したがって | c | なぜなら | d | しかし | e | そもそも |

問一 傍線をひいた熟語(1)～(5)と漢字が同じなのに読みが違うものを含む熟語が下記の各群 a～d にあれば、その記号を選び、ない場合は e を解答欄にマークせよ。

- (1) a 俗化 b 悪化 c 道化 d 浄化
- (2) a 気力 b 力量 c 勢力 d 権力
- (3) a 多重 b 貴重 c 重宝 d 珍重
- (4) a 対戦 b 対抗 c 対置 d 対象
- (5) a 正式 b 正常 c 正確 d 正面

問二 傍線部①の「人間非依存指向」といえないものをつぎの a～f から二つを選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 自然エネルギーを活用する
- b リヤカーをロバにひかせる
- c 兄のおんぼろ車を運転するにはコツがある
- d 田を耕すために耕耘機を購入する
- e 顕微鏡を使って蚊の解剖をする
- f 旅行中に飼い猫に餌をやる装置を作る

問四

- A と B に入る最も適切なものをつぎの a～h から二つを選び、その記号を解答欄にマークせよ。
- a 高度化 b 擬人化 c 取り込み d 精神化 e 節約 f 感情移入 g 複雑化 h 美化

問五 傍線部②「日本では、家に仕事に來た職人に『ご苦労さま』とねぎらいのことはかけるが、フランス語にはこれに対応する常用句がない」とあるが、その理由を述べたつぎの a、e の中から、ふさわしくないものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a フランス人の労働者と雇用者との関係の根底には契約の觀念があるから。
- b フランス人は、庭師に家で作業をしてもらっても、それが大変な仕事であると思っていないから。
- c フランス人は神から人間に課せられた罰としての労働に対しては、金銭の埋め合わせをすればいいと考えているから。
- d 日本人は、何かにしてもらったときに、報酬のやりとり以外に何らかの関係があることを前提としているから。
- e 日本人は、庭師に心をこめて仕事をしてもらいたいと思っているから。

問六 傍線部③の「プリコラージュ」に関する本文中の説明を参考にして、プリコラージュと関係ないものをつぎの a、f の中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a アメリカ南部のキルトは、余った端切れを小さく切って縫い合わせて作ったベッドカバーやランチョンマットなどである。
- b 俊男が、仮面ライダーのプラモデルを買ったのは三年前だったが、ようやく最近それを作ることができた。
- c モシの鍛冶屋は十九世紀後半、外来の鉄砲の入手が難しくなったあと、銃身として自動車の部品を用いた。
- d モザンビークの内戦終結後、平和構築の一環として銃などの武器を使って造形アートを作る運動が起きた。
- e 壁に飾られている絵をよく見ると、花があふれんばかりにかごに入っているが、その花はすべて本物の押し花だった。
- f 幸子の着ているTシャツの左胸にワンポイントのアップリケがついているが、それは大きなシミのあとを隠すためだった。

問七 本文で述べていることに合致しないものをつぎの a～e から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 日本語では、娘は母に「おかあさん」と呼びかけてもよいが、「あなた」といったら変である。その一方、フランス語なら普通である母親からの「わたしのむすめよ」といった呼びかけは、日本語では不自然である。

b 日頃使用している道具をきれいにしてねぎらったり、壊れた道具を供養したり、というのは日本文化の特徴である。

c フランス人にとって、労働は苦役であるから、できるだけしにこしたことはない。目的達成のためにやむを得なければするが、その時には最小限で済ませるのがよいとされている。

d モシ人は常日頃、権力者などのお偉方に贈り物をしたり、労働提供を行って、ウエンデのもつ至高の力に働きかけるための助力を求める。

e 日本では、労働は単に目的遂行ではなく、社会関係を成り立たせるために、立派にやり遂げることが大事である。いわば労働にも美学があるのである。

(三) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

最近、久保田正文氏の『現代短歌の世界』を読んで、アンソロジー^{注1}として見てもすぐれたものだという感想をもった。一人の歌人の全作品を読み通すことも一般読者にとってはまず不可能である。まして、近代百年の代表的歌人の業績を展望することなど思いもよらない。この本のように、すぐれた案内によって代表的作家の代表的作品に触れることができれば、こんなありがたいことはない。それにつけても、日本文学にもっとアンソロジーがほしいという日頃の希望が頭をもたげてきた。外国人がすこし日本文学に興味を示すようになったと思うと、たちまち、海のかなたで日本文学選の類いが出版されるではないか。

われわれは、アンソロジーが好きでないのかもしれない。選集と銘打った書物がないわけではないが、実質上は選集である出版物に「世界文学全集」とか「○○文学体系」とかの名称をつける。抜粹といふことも嫌いらしく、抜粹本などを手にするのを潔しとしない読者も少なくない。完璧、完全、網羅的であることが求められるためか、むしろすぐれた選択こそ注目されなくてはならないような出版物についてすら、ことさら編集の機能がおおわれているのは、おもしろい現象である。これはわれわれの社会でエディターシップ^①があいまいにされていることと無関係ではないように思われる。

責任をもって選ぶことを避ける。それで選集には積極的な価値が認められにくいのだが、とにかく全部を提供して、あとは読者の判断に委ねる。エディターシップは不在である。これがどれほど文化的混乱を生じさせているかわからない。せつかくの知的探求のエネルギーも対象が絞られていないために、拡散して不毛に終わってしまうのである。

諸外国で成功しているブック・クラブ専門家が選んだ書物を毎月会員に頒布^{はんぷ}する組織が、どうしたわけかわが国では育ちにくいのだが、しいてその理由を求めると、アンソロジーが不人気である読者気質をあげることができるように思われる。広義のエディターシップがないために、選ぶということが重視されない。したがって、選択、選集もうまく行われない。これがまた選ぶことに消極的ならしめるといふ悪循環になる。

そうはいってもわれわれの国が大昔からアンソロジー嫌いだったわけではない。それどころか、詩歌はアンソロジーに収録

されて伝わるのが普通だったのである。万葉集をはじめとして古今和歌集、新古今和歌集などはすべて典型的なアンソロジーである。ことに、古今集から新統古今和歌集に至るあわせて二十一の歌集は勅撰和歌集であつて、欽定アンソロジーともいべきものである。これだけ多くの歌集が^(ア)綿として勅令によつて編纂^{さん}された伝統はほかの国にも例が少ないのではないだろうか。当然のことながら、これらの選集では撰者に高い權威が認められていた。『平家物語』に見える平忠度のエピソードは、敵に追われる武將の身で自作を千載集に収録してもらつたためにわざわざ撰者の藤原俊成を訪れたことを伝えている。勅撰和歌集においてはエディターシップが厳存していたと考えてよい。

そういうお国柄でありながら、明治の近代化以来、アンソロジー尊重の氣風がぱつたりととだえてしまったのはなかなか興味ある事實である。⁽³⁾なぜアンソロジーに見向きもしなくなり、エディターシップへの関心があいまいになり、⁽⁴⁾選ぶ伝統が消滅してしまつたのであろうか。

ひとつには、在来の短詩型文学中心から散文中心に移行したことが考えられる。和歌、俳諧は選集をつくるのに適しているが、小説ではそうはいかない。散文、物語では抜粋が詩歌より困難である。それに、印刷術が発達すれば、大量の作品をそのまま収載することができるから、無理に選集をつくるには及ばない。そもそもアンソロジーが編まれるには、すべての作品を記録することが困難だから、すぐれた作品のみを選んでこれを保存しようという意図があることは忘れてはならないところである。印刷の普及はそういう事情を解消するから、選集をつくらなくてはならない必然性のひとつは少なくともなくなった。

しかし、もつと根本の理由がある。それは、選ぶには、棄てなくてはならないということである。棄てるには永続性のある価値は何かがはつきりしてはならない。選択は整理と表裏をなしている。アンソロジーの編者、選者は公正な判断力をそなえた批評家であることが条件である。後世へ価値あるものを伝承していく関所を預かっているようなものである。下手をすれば通してはならぬものを通し、通さねばならぬものを阻止することになるかもしれない。それを思うと気軽にアンソロジーをつくつてみるか、などとは言えなくなるに違いない。生れた作品をそのままにしておいて、時間という自然の関守のチ

エックに委ねておいた方がはるかに安全だということになる。そうなれば同時代の文学、それに近い時代の作品はあまりにもたくさんあって收拾がつかない。歴史的展望もあったものではない。それで「まだ時の試練を経ているから判断を下すのは尚早である」などと責任を回避するのが文学史家の常套手段となるのである。

選ぶには価値についての理念が前提となるわけだが、外来文化の紹介、咀嚼そじやくに汲々として来た近代日本において、普遍的なものは何であるかというようなことを考える余裕がなかったとしても誰も責めることはできない。整理はもっぱら自然の淘汰にまかせて、あえて意識的な選択を避けていたのではあるまいか。それで形式的な包括、網羅主義となり、したがってアンソロジーはかえりみられないという次第になる。

ある時代が生み出す表現全体は、そのままでは余計なもの、不純物を内包している。それを取り除く必要があるが、とくに整理をしようと思わなくても時が経てば必然的に忘れられる。この忘却という整理法よりも積極的なのがすぐれたものを選ぶ編集で、これは不要なもの、価値がないと思われるものを棄てる、ゆすり落ゆすりおとしの機能をもつことに注目すべきである。表現、作品にとつては、ゆすり落としに堪えて生き残るか、それとも、ゆすり落とされて忘却の淵に沈むかはまさに死活の問題である。ひとつのアンソロジーで落とされてもほかの選集で拾われれば望みはつなされる。具体的な選集の形をとらない場合でも、読者の頭の中ではつねにゆすり落とし作業が行われていて、おかしなものはどんどん棄てられる。そうして多くの人々の頭にあるアンソロジーの中で生きつづけるものが、^①カン用としての意味、言いかえると普遍的、古典的性格をもつ。

選集を編んで出版するというのは、各人が無意識に頭の中でつくっているアンソロジーの特殊な場合であるにすぎないのである。人間が理解するのは、表現のあるがまをそっくり肯定して呑み込んでしまうのではない。ゆすり落としによって具合の悪いところをとり除き、さらに大幅な整理の必要なきには、ふるいにかけて一部を残して他を除去してしまう。このように考えてくると、人間の精神活動そのものがエディターシップによるアンソロジー化とかわめてよく似た性格を帯びていることに思い至るであろう。

選集をつくるときに起っているもうひとつの重要な問題は、引用である。アンソロジーは全体の一部分を引き抜いてきて、それらを新しい全体にまとめる作業によって生れる。当然のことながら背後に引用についての原理が存在するはずで、いい加減な引用をしてすぐれた選集のできるわけがない。

形式上から言えば、引用とはAというコンテキスト(Ca)^{注3}の中にある表現XをBという新しいコンテキスト(Cb)の中へと移すことである。表現の意味はコンテキストによってつよく規制されるから、コンテキストAの中の意味(\overline{X} /Ca)はコンテキストBのXの意味(\overline{X} /Cb)とは等しくない。つまり、引用すれば、程度の差はあっても、かならず何がしかの意味の変化を伴うということである。これを承知しないで引用が行われると、表現の破壊につながりかねないし、逆に引用の本質をすっかり把握していれば、もとはさほどでないものが引用されて見違えるようになることも可能である。すぐれたアンソロジーは後者のような引用によってつくられる。

われわれの社会では全般として引用についての配慮が充分でないように見受けられる。これがすなわちすぐれたアンソロジーの生れにくい原因であるが、問題はそれにとどまらない。他人の言葉や文章を任意に引用して、しかもその責任を引用者が負わずにもとの発言者や筆者に帰することがまかり通っている。そのために発話者の真意がとんでもなく歪曲されて伝わることに絶えず起る。この点では、新聞雑誌などが談話として掲げる記事作成の背後にある引用のモラルにも改善すべきところが少なくないはずである。

表現の一部を引用するときには、まず、その部分の引用可能性ともいべきものを検討しなくてはならない。引用すればかならず意味の変動を伴うことはすでに述べたが、プラスの変化になるか、マイナスの変化であるかによって引用可能性が正になるか負になるかが分かれる。アンソロジーの中で生き生きとしているのは例外なく正の引用可能性をもつものである。^④

試験問題に文章が引かれる場合でも、坐りのよいのは、正の引用可能性をもっている部分を引いたときである。そういう部分があるにむやみとあるわけではないから、多くの人がめいめいに苦心して問題を選ぶと偶然同じ本の同じ箇所になるといふことが起る。いわゆる頻出問題はこうして生れるのだ。

実際に引用という形をとらない引用が実に多いこともリユウ意^(ウ)しなくてはならない。かつては全体がはっきりしていたことも時の経つにつれて細部は忘れられる。そうして残った印象鮮明な部分は、いわば自然に引用された、正の引用可能性をもつたものだと考えられる。歴史はこうして無意識に行われた引用の蓄積である。

文学史という歴史を形成するのも、不特定多数の読者の頭の中で起っている引用の結晶にはかならない。そういう引用を何度も何度も経験したものが普遍性とか古典性をもつのである。実際に引用につよく、アンソロジーの中で光るアンソロジー・ピース(選集向きの作品というほどの意)と呼ばれる小品がある。これは、苗床に生えていたときより、移植した後の方がよく育つ植物に似ている。

引用は、苗床から広い土壌へ苗を移すときのように、引用されたこと自体に注目を惹きつけ、それによって意味を強化するものである。もとのコンテキストを切り捨てるために、より大きな空間で意味が拡大されて、含蓄が豊かになる。何気なく読んだ文章の一部を抜書きすると、どことなく警句的な響きを持つように感じられるものである。

アンソロジーは、おびただしく生み出される表現の人為的淘汰の方法である。逆に、アンソロジーによって忘却を免れる者は生存をまっとうすることができる。つまり選集をつくるという営みの中に時間がいっつの間に行っている古典形成のプロセスが小規模ながら展開されているということである。たかがアンソロジーなど^⑤と見くびることはできない。すぐれたアンソロジーができないような社会なら、古典の概念もあいまいであるほかほかなく、したがって、伝統というものも確立しにくい。わが近代文化に確固たる伝統が欠けていることは、選集編纂の不^(エ)シンとあるいは深部において結びついているかもしれない。

(外山滋比古『エディターシップ』より。ただし原文の一部を変更した。)

注1 アンソロジー 詩文などの選集。

注2 ゆすり落とし 元来は、船を建造するさいに試運転によって具合の良くないところを見つけて直していく作業のこと。

注3 コンテキスト 前後の文脈。

問一 傍線部(ア)～(エ)のカタカナの部分にふさわしい漢字を含む文章を、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(ア) レン綿

- a 日々の鍛レンが重要である。
- b レン愛ドラマはもう飽きた。
- c 清レン潔白の身になりたい。
- d 閑レン性のない話ばかりする。
- e 熟レンの技術を身につける。

(イ) カン用

- a チームのカン督を辞任する。
- b カン性の法則に従う。
- c カン容な心で接したい。
- d サークルのカン誘がしつこい。
- e 悪循環カンに陥る。

(ウ) リユウ意

- a リユウ行に鈍感な私。
- b 細かいリユウ子が凝集する。
- c 王家はリユウ盛を極めた。
- d 新聞に川リユウが掲載された。
- e アメリカにリユウ学する。

- (エ) 不シン
- a シン判の判定に抗議する。
 - b シン 重な態度が望まれる。
 - c 地域シン興の計画を立案する。
 - d シン 実がいつも一つとは限らない。
 - e シン 療所に駆け込む。

問二 傍線部①「エディターシップ」の説明として適切なものをつぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 日本の伝統においては古来よりエディターシップが不在である。
- b 人間の精神においてエディターシップはつねに意識的な活動である。
- c エディターシップが尊重される社会では、価値あるものを選ぶ人の権威は認められにくい。
- d エディターシップによって知的探求のエネルギーを拡散させることができる。
- e エディターシップを発揮するためには何が永続的な価値なのかをはっきりさせる必要がある。

問三 傍線部②「古今和歌集」の撰者として適切な人物をつぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 藤原定家
- b 大伴家持
- c 後鳥羽院
- d 紀貫之
- e 西行法師

問四 傍線部③「なぜアンソロジーに見向きもしなくなり、エディターシップへの関心があいまいになり、選ぶ伝統が消滅してしまったのであろうか」とあるが、筆者の説明と合致しないものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 後世に価値あるものを伝えるという責任を伴うから。
- b 外国文化を吸収することに懸命であったために選択に必要な普遍的価値観について考える余地が乏しかったから。
- c 文学の中心が短詩から小説へと移行したから。
- d 作品があまりにもたくさんあり、時の試練に委ねるよりほかないから。
- e 印刷技術の発達より、作品を選ぶ必要性が薄れたから。

問五 傍線部④「正の引用可能性」の例として適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 国語の入試問題としては滅多に出題されない作品。
- b アンソロジーに収録されたことでその良さが失われた文章。
- c 時間の流れのなかで忘却を免れた記述。
- d 新聞雑誌などで都合よく切り取られた識者の談話。
- e 現在では忘れられているものの、かつてはベストセラーとして読者に愛された作品。

問六 傍線部⑤「すぐれたアンソロジーができないような社会なら、古典の概念もあいまいであるほかはなく、したがって、伝統というものも確立しにくい」とあるが、この文章の説明として最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 伝統を確立できるのは古典文学のアンソロジーだけなのだから、もっと積極的に編纂していくべきだということ。
- b マスメディアによる不適切な引用がまかり通るような社会では、正の引用可能性が損なわれてしまうということ。
- c アンソロジーの編纂とは価値のあるものを積極的に選び、後世に残していこうとする営みであるから、それが欠けていると伝統も確立されにくいということ。
- d 自然に委ねるのではなく、人為的な取捨選択によって貴重なものが失われてしまう社会では、確固たる伝統を生み出すことはできないということ。
- e 文学史とは不特定多数の読者によって行われる引用の結晶なのだから、文学史に目を向けない限り、すぐれたアンソロジーも伝統も生み出されないということ。

問七 本文の内容に合致するものをつぎの a～g の中から二つを選び、それらの記号を解答欄にマークせよ。

- a 現代の日本でアンソロジーの人氣が乏しいのは、選ぶということの価値が充分に認められていないからである。
- b ブック・クラブが日本で未成熟なのは、専門家が本を選ぶという責任から逃げているためである。
- c 引用によってある表現を別のコンテキストへと移し替えるさい、意味の変化が生じるかどうかは引用者の技量にかかっている。
- d 時の流れのなかで記憶されるべきものは記憶され、忘却されるべきものは忘却されるのだから、意識的に淘汰を行う必要性はない。
- e 国語の試験問題で同じ本の同じ箇所が用いられることがあるのは、問題作成者が過去の問題を引用しているからである。
- f 未来に何を残し、何を切り捨てるのかという判断を伴う以上、アンソロジーの編者、選者の責任は重大である。
- g 一般読者に求められるのは、可能な限り数多くの作品に目を通し、自らの手で未来に残すべきものを探し出すという努力である。

